

60

1613

60-1613

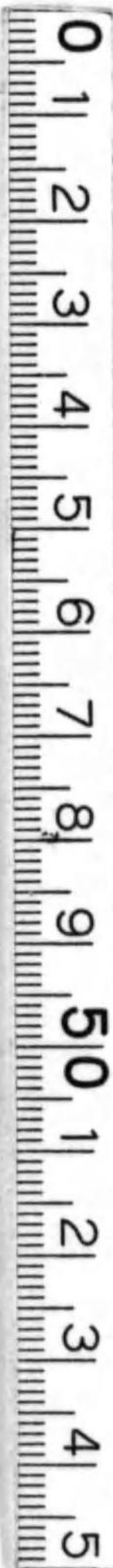


1200501273316

讀書普及  
運動記念

皇漢鮮古方醫籍展覽會目錄

朝鮮總督府圖書館編



始





6  
16

昭和十四年十一月

小冊子第六冊  
(展覽目錄第四)

「讀書普及運動」記念

皇漢鮮古方醫籍展覽會目錄

朝鮮總督府圖書館



千金十一穴歌  
 三里內庭穴 曲池手合谷 陽明諸通連 胃腹中欬 頭面病可療 委中與偏穴 清熱解毒 喉痛即吐也  
 三百六十五  
 十一千金穴  
 治痛十一症歌  
 胸竹痛打主頭疼 更去大邪性陽動 合谷曲池先針屬 依此下針不左  
 偏正皆宜向中 凡此又刺三分際 永年注疔痛不侵 管成隨手便安牙  
 合谷三間穴 更向大邪針眼痛 牙疼三分針 更推大邪左之右  
 大腸穴內用行針 齒痛依若指上為 交互相連十四處 莫之天此必效也  
 耳門又隔三分許 太陽任內為針處 莫之天此必效也 針下之時必見功  
 七分竹隔耳中聲 更如七壯於此宜 針下之時必見功

62 針 灸 (22頁參照)

濟衆新編卷之八  
 內局首醫 康命吉奉 敬撰  
 藥性歌 元三百三首  
 人參味甘大補元氣 止渴生津 調榮養衛 治肺中實熱  
 勞嗽吐血 勿用肺虛氣短少氣虛  
 常煩熱去 產用之反 藥性歌  
 黃芪性溫 收汗固表 托瘡生肌 氣虛莫少 味甘性平  
 愈大用 藥性歌  
 白朮甘溫 健脾強胃 止瀉除濕 兼除痰痞 治受暑邪  
 以蜜水浸炒用之  
 茯苓味甘 滲濕利竅 化痰涎 赤通水道  
 甘草甘溫 調和諸藥 炙則溫中 生則瀉火 味甘性平

74 濟衆新編 (26頁參照)



## 前　　が　　き

今次の聖戦を契機とし、東亞建設の大精神を基調として、東洋學術再検討の聲内外に澎湃たるものあるは欣快に堪へない。我が杏林界に於ても、從來西洋醫術の獨善觀念が無批判的に横行濶歩してゐたが、今や東洋古醫方の再吟味が強硬に叫ばれつゝあるのは當然の過程である。於是乎、本館は今年の「讀書普及運動」に當り、その儲藏醫籍の一部を展列し、江湖諸彦の高覽に供することゝした。乍併その選擇と解説とは未だ盡さざるもの多きを憾みとするが、幾分にも東洋醫術の振作に裨補する處あらば洵に望外の喜なりと云爾。

昭和十四年十一月



日本内地之部

一 傷寒論述義

多紀元堅著 天保一五年

二册

本書は漢の張機著、晋の王叔和編、金の成無己の注に係る傷寒論を漢文にて講述敷衍したものである。即ち三陽三陰の大義は勿論、變壞の諸候に至るまで類論辨列して傷寒論の大義が端的に了解出来るやうに苦心した良著である。

黄帝八十一難經疏證

多紀元胤著 文政二年序

難經の注疏は多いが大抵迂遠で而も稽古に疎いのに鑑み、諸注の適切なるものを選んで更に文證を加へたものである。著者は徳川幕府の醫官寛政元年に生れ、文政五年には法眼に絞せられた。多紀元簡はその父で多紀元昕はその子である。

三 難經韻語圖解

岡田靜安著 天保六年序

二册

本書は先秦の古醫書難經が文辭艱深、義理精奥なるため理解に困難であるに鑑み、文の難讀義の難通、理の難曉なるものを韻に因て求め、理解に便ならしめたものである。若し難經が漢方醫界の指南書で



朝鮮總督府圖書館寄贈本



あることが事實であるとするならば本書は實に杏林の津筏ともいふ可きものである。

#### 四 診脉樞要秘録

今大路道三編 昭和一〇年 謄寫版 一册

本書は脉法を詳論したものでその内容は總論脉式男女診法、七情見證、虎口辨歌、醫宜盡善等の五〇項である。著者道三先生は名醫曲直瀬玄朔の子として天正五年に生れ、識見卓越、自ら醫宗の風格を具へてゐた。後陽成天皇がその累代の功を嘉して橘姓を賜ひ、又東福門院の難産を治療して秀忠から劍を以て賞せられたことは彼一生の榮譽と拔群の力量とを端的に物語るものといへよう。

#### 五 古脉法圖解

村山維益著 寛政八年

一册

本書は著者がその雁行と討論したものを集録したもので、脉に關する諸經中最も切要なるものを網羅してゐる。その内容に就ては、兒玉疆の跋の一節に、頃者村山士謙氏、著古脉法圖解、以正千載之訛謬、醫百家之瞽目、可謂其見卓越乎西土之諸醫矣、學者由是參看諸經、則古義自朗然、而及切診之際、辨證處方、恰如持左卷矣とある。

#### 六 鍼灸拔萃大成

岡田三郎右衛門編カ 元祿一二年 七册

本書は鍼灸拔萃に缺略誤謬の多いことを遺憾として、其の缺略を補ひ、其の誤謬を校へ、更に之を圖解

して初學者でも容易に理解出来るやうに編修したものである。編者は貞享より寶曆に亙て大坂心齋橋筋吳服町角で出版業を営んだ者である。

#### 七 醫心方

丹波康賴著 昭和年間カ 寫真版 三〇册

本書は幾百の支那醫籍中より病源候論、本草藥性、服石食餌等に關する要項を博搜網羅したもので、實に本邦漢方醫界の指標である。この書は天元五年(高麗成宗元年)業を起し、永觀二年(高麗成宗三年)工を終へて奏進したのである。著者は平安時代の名醫で、その祖先は漢の靈帝であるが、丹波宿禰の姓を賜はり、官は鍼博士、左衛門兼波介に至つた人である。尙承曆四年十月(高麗文宗三十四年)高麗王からの求醫に對し、その無禮を詰り、大江匡房の作に係る、雙魚難達鳳池之浪、扁鵲豈入雞林之雲の牒を以て之に答へたことは周知のことであるが、この事實は當時の醫術發達の著しさを物語るものといへよう。

#### 八 醫法明鑑

曲直瀬玄朔編 寛永一八年 四册

本書は正親町帝に薬を上つて法印に進み、延命院後延壽と改むの號を賜つた東井先生が治療法を類に従つて編輯したものである。而してこの書は寛永十八年九月、京都二條通松屋町武村市兵衛の上梓に係るもので、皇漢醫方界の津筏に價するものである。

#### 九 本朝醫考

黒川道祐編 寛文三年序

一册



本書は主として神代より慶長年間に至る諸名醫の略傳を掲げたもので、上巻は細川勝元を以て終と爲し中巻は和氣廣世を始と爲してゐる。而して下巻には丸散石藥の名稱並本朝國史の中醫家に關涉する事を殆んど悉く抄出收録してゐる。

一〇 名醫方考繩愆 北山道長著 元祿一〇年 一〇册

本書は明の吳崑の著名醫方考を忌憚なく檢討修正したものである。著者は徳川初期大坂の名病工、長崎の人で父は姓は馬、名は榮宇、明人である。道長學識該博、卜筮、風水、地理、禪理一として通曉せざるものがなかつた。著書には、北山醫案、北山醫話、方考評議首書、纂言方考、首書醫方口譯集等多數がある。

一一 古方翼 野間友眞著 寛政六年序 五册

本書は傷寒、中風、瘧病、小兒諸症、婦人諸症、古瘡湯火傷等五十餘の病症を部類して、その治驗を論じ、併せて諸家の口傳秘方を殆んど洩さず集めて、療治の仕方を片假名で書し、閱讀療治に便ならしめたものである。

一二 醫略抄 丹波雅忠著 寛政七年序 一册

本書は今より七百九十九年前、即ち白河天皇の永保元年に成書されたもので、晋唐醫書三十四部の中

より急病を治するに適切するものを集録してゐる。その内容を見るに、病源、治療、方劑等數十項に互つてゐる。著者は治安元年に生れて、寛治二年に歿したが、日本の扁鵲といはれた人である。

一三 醫家初訓 多紀元惠著 一册

本書は法印侍醫であつた多紀元惠が醫を志す初學者の爲に、執筆したものである。故に言の俚辭の鄙を顧みず、婆心、叮囑、國字を以て綴つてゐる。その上著者は著者の子元簡が本書を一家に秘藏するよりは世間に頒布することを是と考へた英斷に發足する。

一四 醫方紀原 甲賀通玄編 元文五年 三册

本書は著者が治療の餘暇を利用して支那歴代の醫籍より蒐集した妙方秘傳を分門比類し、それに詳細な考證を施したものである。著者は京都の病工で健齋と號し、著書としては、本書の外に重訂古今方彙がある。

一五 斥醫斷 畑惟和著 寶曆一二年 一册

本書は漢醫古方を論述した吉益爲則の醫斷を逐條反駁したものである。著者は江戸末期の名醫で、延享の初め法橋に敍せられ、御醫、法眼等を経て天明元年法印に敍せられた。尙廣く門戸を開いて斯界



達士の養成に務め、その弟子二千人と云はれる。

一六 醫言靈

脇田信親著 文政五年序

一册

本書は病門を分けてその治方處方を論じてゐるが、神代の名遣方の治験の懸絶なる者を務めて収載してゐることは本書の異色とも見られる。著者は江戸後期の名醫で字は全莚、槐莚と號す、祖先は加賀の人、二十三歳の時文學に志して江戸に來り、遂に印牧立順に従つて醫を學んだ。文政元年松山侯に聘せられて侍醫となり、嘉永四年九月歿した。

一七 生生堂醫譚

中神孚著 昭和一〇年 謄寫版 一册

本書は吉益和田、高階の諸大家と共に、江戸末期に於ける平安の四天王と歌はれた琴溪中神先生の遺著を窺ふに好箇の書である。内容は總論、傷寒論、讀書、診脈、鍼鍼、藥性、溫補、古方後世並有弊、吐方法、瀉法、勞瘵、輕粉辨、寒熱虛實、雜論の十四項で、門人伊藤王佐の輯録に係るものである。

一八 雜病辨要

淺田惟常著 安政三年序 三册

本書は瘧、濕、喝、百合、狐惑、陰陽毒、霍亂等五十餘項に就て脈證と治法とを詳述したものである。家庭の備附用或は婦女子の繙讀書としては顧慮の餘地がないでもないが、濟世の實筏たることは疑ない。

一九 診病奇核

多紀元堅著 石厚保秀校 昭和一〇年 一册

徳川時代の中期に、古方の大家後藤良山が按腹と候背とを古來の診方望聞問切に加へてから腹診は世人の注目を引くやうになつた。其後腹診に關する書が多く上梓されたのであるが、是等の書の粹を集めて腹診法を完成したのが本書である。本書に北山壽安以下十七家の發明の要旨が列擧されてゐる點より見ても腹診界の好箇の参考書たるに恥ないと思ふ。

二〇 六診提要

石原保秀校 昭和一一年 一册

古來の診法に望聞問切の四診があつたが、江戸時代の中世に斯道の泰斗後藤良山が之に按腹と視背とを加へて六診としたのである。著者はこの流れを汲んだ人と思はれるが、未だその何人たるかを知らぬ由がない。本書は平安梁嚴師の秘藏本を石原保秀氏が校したものである。尙、卷末には香川修徳の一本堂行餘醫言を附録してゐる。

二一 醫事啓源

今村亮著 元治元年 一册

本書は洋醫又は洋醫を學ぶ者達が往々その本が漢土より出たことを知らず、洋醫術を醫治の創闢となすのを痛駭したものである。即ち、洋人は織巧であるが、漢人は蠶大であつたので、その根源が忘れら



れ主客顛倒の觀を抱かしめるとなし、解剖、瀉劑、熨法等二十項につき現在の洋醫術は漢醫術の糟粕に過ぎないことを明かにしてゐる。

二二 醫 療 羅 合 藤井見隆編 享保九年序 七册

本書はその自序に於ても明かにしてゐるが如く、古今醫家の秘方即効あるもの或は年來見聞した和漢の妙劑を纂輯したものである。而してその文辭は平易を旨とし、イロハ字を用て病門を分類してゐるので、閱者の便宜一方よらぬものがある。

二三 吐 方 考 嘯 菴著 寶曆一三年 一册

本書は汗、下、吐三者を並び行ふのは古醫道の常識であるが、然るに汗、下方を知つて吐方を知らず、吐方を知つて汗、下方を知らぬのが醫界の通弊であることを指摘し、同好の士の爲に、吐方の對症投藥方を概述したものである。

二四 吐 方 編 荻 凱著 寶曆一四年 一册

漢方には古來疾病を治療するに吐、下、汗の三法があるが、本書はその中の吐方に就て詳論したものである。而して通篇文章を修飾せず、平易を旨として専ら讀者の理解に便ならしめてゐる。その内容は

病症、治方、藥劑等に互り病工の好伴侶といひたい。

二五 廣 惠 濟 急 方 多紀元惠編 寛政二年跋 三册

本書は突發的の事故或は毒草の誤服等に因り起る凡る危急の際の救方を網羅集成したもので、著者が數十年間、潭心研精博訪廣搜した總收穫である。その内容を見るに卒例、卒暴、諸證、外傷、横死、諸物入、九竅、諸物中毒、婦人産前急證、臨産急證、産後急證、小兒急證等の十類に分ち、繪圖を以て懇切叮嚀に論述してゐる。

二六 山 脇 家 八 十 二 秘 方 石原保秀校 昭和一〇年 謄寫版 一册

本書は東洋、東門等の名醫を出した山脇家の秘方を集録したもので、内容は試妊娠方から厲風、諸血毒、久淋に互る八十二項で、流石に奇方妙劑に富んでゐる。惟ふに、本書を繙く實際家及び篤學者は得る所が尠くないであらう。

二七 荻野先生治療書 寫本 一册

本書は古今醫籍の名方及び民間療法を纂輯したものであるが、文辭の平易、施藥の簡便なる點より見て、素人或は家庭用醫書として相當重寶なものと思はれる。本書は勿論寫本であるが、卷末に「于時慶應



二年在歲丙寅仲秋初旬識同生堂南窓下義禮<sup>花</sup>押の奥書がある。

二八 脚氣提要 附養生方 西田尙綱編 文化四年 二册

本書は浪速の名醫西田尙綱が博く古籍を涉獵して得た蘊蓄と民間の治療法とを基礎として、一般大衆の爲に入念編録したものである。このことは皆川愿の序文の一節に「予雖素昧醫事、而爲一過讀之、其言皆似多可確信者矣」とあることによつても容易に知ることが出来る。

二九 脚氣鈎要 今村亮著 文久元年 二册

本書は脚氣病の原因、診法、治法、配劑等數十項に關し、和漢の醫書、古今の經驗を基礎に詳論したもので、眞に脚氣病者の伴侶の觀がある。著者は了庵と號し、明治初期に於ての皇漢醫界の巨匠である。明治十五年には皇漢醫道の沿革を東京大學に於て講じたことがある。

三〇 按腹圖解 大田武經著 昭和年間後摺 一册

本書は按腹法を國字と繪圖とを以て初學者、婦女子でも容易に會得出来るやうに論述したものである。その内容を見るに、導引、按腹活套、候腹辨、孕婦按腹圖解、自行療術圖解、收神術等十二項を収録してゐる。

る。著者は大阪の名醫で而も法橋であつた人である。

三一 産科指南 大牧周西著 文政九年序 二册

本書は僻地の婦人が難産の爲め、命を殞すこと再三あるに鑑み、之が救濟を思立ち、賀川氏の産論に和して編著したものである。その内容は、妊娠胎位説、妊娠日數、按腹子癩等六十一項に互り、その説の骨子は安産の要諦は整胎にあるといふことである。兎に角本書は産婦人科の準繩であり、又指南書の役割を演ずるものといへる。

支那之部

三二 重廣補註黃帝內經素問 唐王冰註 道光二九年 清版 六册

本書は二十四卷六冊もので、漢方醫の天池源泉といはれるものである。本書は夙に朝鮮内地に於ても上梓され、皇漢鮮を通じて本書の研究書、註釋書は數十種の多數に上るが、荻生茂卿の素問評、金劉守眞の素問要旨論、朝鮮の清版黃帝內經の覆刻本等はその一例である。而して註者王冰は唐の太僕令で、八十餘歳を以て歿した。



三三 素問入式運氣論奧

宋劉溫舒著 寬永二十一年 一册

本書は黄帝と岐伯、鬼臾區、伯高、少師、少俞、雷公等六臣との問答書といはれる素問の奥義を詳論したものである。即ち素問は支那最古の醫書であり、天地陰陽、臟腑經絡の理、鍼石炮灸の術を明かにしたものであることは周知の通りであるが、本書はその中樞を爲す運氣説の奥義を詳論したものである。何れにせよ、素問研究上、本書のもつ價値は並大抵でないだらう。

三四 黄帝内經素問

明吳崐註 元祿六年 一四册

素問は古今の醫家が墳典として之を宗としたが、その解釋に於ては或は經を離れ或は義に反いて諸説紛々たるものがある。そこで吳崐は之を遺憾に思ひ、素問の各註を取て其の指歸を一にしたのが本書である。著者は儒を業としたものではあるが、醫業に盡した功績も決して尠くない。

三五 素問靈樞類纂約註

清汪昂編 光緒一三年 清版 三册

本書は支那最古の醫書といはれる黄帝素問と支那醫道の古典である靈樞とが、病證、脈候、臟腑經絡、鍼灸、方藥等と雜然記録されて、閱者の困難尠らざるに鑑み、適宜纂註整理したものである。その内容を見るに、全篇を藏象、經絡病機、脈要、診候、運氣、審治、生死雜論の九篇に分ち、類を以て相從はしめてゐる。

三六 金匱要畧

漢張機著 寬政元年 二册

本書は漢醫方の宗といはれる漢の仲景張機が穎特の資に任せ、群書を採摭して成書した傷寒卒病論の殘缺本である。即ち仲景は最初傷寒卒病論十六卷を著したが、その中の六卷は夙に湮滅したのである。其後宋の翰林學士王洙が偶雜病方三卷を蠹簡の中から發見したが、これが即ち本書である。その内容を見るに、上卷には傷寒を辯じ、中卷には雜病を論じ、下卷には婦人療方を收めてゐる。

三七 金匱玉函經二註

宋趙以德衍義 清周揚俊補註 光緒二四年 清版 一六册

東垣之脾胃、河間之溫熱、丹溪之濕熱、王安道之統論、易思蘭之發明、薛立齋之虛弱等は皆力を漢張機仲景の金匱玉函經、傷寒論に得てゐることを後學者が知らぬのを遺憾となし、趙以德の衍義した本書に補註を加へて上梓したものである。而して趙氏衍義本は當時既に缺帙多く、その全璧は容易に得られず、二十餘年に互る捜査の苦心も徒勞であつたことを序文に於て述懐してゐる。

三八 傷寒論

漢張機著 寬政九年 三册

傷寒論は漢の張機の名著たることは周知の通りであるが、本書は明の趙開美が宋版を得て校刻した



ものを淺野徹が更にそれを校正上梓したものである。而して校正に際しては、原文に削除す可きものもあるも、徒らに之をなさず、自己の意見は欄外に掲げた點より見て可成良心的勞作ものと見られる。

三九 傷寒全生集

明、陶華著 乾隆四七年序 清版 四冊

本書は、漢の扁倉張機の傷寒論に見えない妙方秘傳を多々収録してゐることゝ、又著者の學問が圓熟した晩年の勞作物であるといふ點に於て我等の注意を引くものである。而して行文稍鄙俚に互る嫌があるも、雖も言簡にして意到つてゐる點等は看過出來ない。

四〇 難經本義

元、滑壽著 萬治三年 二冊

難經は支那最古の醫書である黄帝内經の疑問を明かにしたもので、周代秦越人の著といはれるものであることは周知の如くである。本書はこの難經を蘇軾、朱熹、張機、李杲、紀天錫等の諸說、並難經補註、難經誌、難經辨正釋疑、難經本旨、難經說等の諸書を參酌するは勿論、自説も豊富に織込んで精密に辯論考證したものである。

四一 難經釋

清、徐大椿著 寬政一二年 二冊

難經は黄帝素問内經の精要に基き、その蘊奥を發明したもので、周代秦越人扁鵲の勞作とされてゐた。



其後の多くの注釋書も之を是認し、異論を見なかつたのである。然るに本書は素問の義と相乖く所を舉げて、之に忌憚なき辨駁を加へたるは勿論、その得失を披ひ、銖銖を控すること極めて嚴で、その著者も秦越人と見ない。要するに本書は古人の蒙を啓いた所が多い點より見て、難經研究の指南書と見得るものである。

四二 銅人腧穴鍼灸圖經

宋、王惟一編 二冊

本書は翰林醫官朝散大夫殿中省尙藥奉御騎都尉賜紫金魚袋王惟一の纂輯に係るもので、或は銅人經ともいはれる。而して本書は鍼灸界の梁筏といふ可く、その論述は叮嚀精密を極め、前人の未だ臻らざる所を發明した點が多いのは注目に價する。

四三 增補續圖鍼灸大成

清、鄭維綱、歸天鎔共校 石版 六冊

本書は名針家楊繼洲の編著に係るもので、素問、醫經小學、鍼灸大全、難經本義、醫學入門等から鍼灸法の秘傳妙方を博搜集大成したものである。その内容を見るに、仰人周身總穴圖、周身經穴賦、玉龍賦、五運六氣歌、仰人腹穴尺寸圖、肝臟圖、穴法圖、治症總要等數十項を收めてゐる。尙本書は昭和九年京城博文書館に於て複製したものである。



四四 東垣十書

金、李杲編

明版 一二册

本書は李東垣杲の勞作、並その代表作脾胃論を祖述した一聯の書、即ち、崔真人の脈訣、朱彥脩の局方發揮、李杲の脾胃論、朱彥脩の格致餘論、李杲の蘭室秘藏、李杲の内外傷辨、李杲の此事難知、王好古の湯液本草、王履の濟洞集、齊德之の外科精義の十書を一纏めにしたもので、漢方醫の座右書とされてゐる。

四五 脾胃論

金、李杲著

二册

本書は脾胃に關する書が從來相當多數上梓されたが、その所説が簡略に失して、奧義を明かにしたものがなかつたことに鑑み、編著されたものである。その内容は脾胃虛實傳變論、氣運衰旺圖説、大腸小腸五藏皆屬於胃、虛則俱病論等數十項に互り詳論してゐる。著者は東垣老人と號し、傷寒癰疽眼目病に特に長じてゐた。時人之を神醫と稱し、その著書には内外傷辨惑論、蘭室秘藏等がある。

四六 新編名方類證醫書大全

明、熊宗立編

大永八年跋 堺版 八册

本書は明の儒醫道軒先生の編著に係るもので、醫家の至寶といふべく、元の孫允賢の醫方大成に増益したものである。支那の儒釋書は早くから我邦に於て版行されたが、支那の醫書に至つては本書を以て嚆矢とするといはれてゐる。その内容を見るに、風寒、傷寒、瘧泄、瀉、痰、氣、脾胃、諸虛、癆瘵、頭痛、腰痛、五

疸、水腫、宿食、失血、五臟内外所因證治、鼻、癰疽、瘡癤、急救諸方、婦人調經、衆疾論、妊育、小兒方、各門の妙方を收めてゐる。

四七 明醫雜著

明、王綸著 正保二年

一册

本書は著者が窮郷下邑の名醫無き所の爲に、隨證治例を示したもので、素人でも方を按じ病を治すことが出来ることを眼目としてゐる。その内容を見るに、醫論、發熱論、補陰丸論、枳朮丸論、化痰丸論、暑證、泄瀉、痢疾、瘧疾、咳嗽、痰飲、續醫論、暑病、勞瘵等を收めてゐる。

四八 醫學正傳

明、虞天民編 明曆三年

八册

本書は著者が祖父の家業を承けて醫界に入り、刻苦勉勵の後、その晩年即ち七十八歳の時に漸く成書したものである。その説は素問難經に根據して、諸説を縦横し、勞著者の意を通じてゐる。本書が特に我等の注意を引くのは、その立説に際して、飽迄正學の範圍を離れず、空言附會を排除した良心的勞作であるからである。その内容を見るに、或問、中風、傷寒等内外景の數十項に及んでゐる。

四九 萬病回春

明、龔廷賢編

一〇册

本書は明の太醫院醫官、金谿雲林、龔廷賢の編修に係り、萬全一統述、藥性歌、諸病主藥等、漢醫方一般に互



る對症治方を廣搜纂輯したものである。而して本書は支那本にも朝鮮本にも刊記を缺くのが常であり、著者にはこの外に壽世保元、普渡慈航等の名著がある。

五〇 雲林醫聖增補醫鑑回春 明、龔廷賢著 朝鮮寫本 八册

本書は明の太醫院の御醫、金谿、雲林、龔廷賢の編著をその子醫官龔定國が續修したものである。その内容を見るに、病源治方、藥性等を徳、作、天、地、道、貫、古、今、の八集に分つて収録してゐる。尙本書は雲林醫聖、普渡慈航、或は普渡慈航ともいはれる。

五一 御纂醫宗金鑑

清、和親王等編 乾隆五年序 清版(武英殿版) 四八册

本書は清の太醫院の者達が主となつて、漢方醫の秦斗漢、張機の著を初め、各方面の醫方を博搜集大成し、武英殿に於て上梓したるものである。その内容を見るに、訂正仲景全書、傷寒論註、訂正仲景全書、金匱要略註、刪補名醫方論、編輯四疹心法要訣、編輯運氣要訣、編輯傷寒心法要訣、編輯雜病心法要訣、編輯婦科心法要訣、編輯幼科雜病心法要訣、編輯痘心法要訣、編輯幼科種痘心法要旨、編輯外科心法要訣、編輯外科心法要訣、編輯刺灸心法要訣、編輯正骨心法要旨の十五種に及んでゐる。

五二 醫學源流論

清、徐大椿著 嘉永五年 四册

本書は王公大人、聖賢豪傑といはず、苟くも人間として生れた以上は病氣を全然避けることは空想に近い願望であり、罹病の上はその生殺を醫師に任かせることが事實であるとするならば、醫師の責務は重且大なることを痛感したことから成書されたものである。その内容を見るに、經絡臟腑脈病、方藥の四門に分つて詳論してゐる。

五三 痘疹會通

清、曾鼎著 純祖三四年カ 四册

本書は痘瘡に關する古今の醫書を涉獵してその秘傳妙方を収録したものである。本書が特に我々の注目を引く點は、在來の諸痘書が等閑視した婦人の痘症論と、又諸家の痘書に於ては餘り見られなかつた詳細な麻疹論を載せてゐることである。尙、この書は純祖三四年(推定嶺營大邱)に於て上梓されたものである。

五四 痘疹定論

清、朱純嘏編 康熙五二年序 二册

本書は清の太醫院御醫、玉堂氏の纂輯に係るものであるが、その内容は痘瘡根源論、分別諸家調治論、痘疹原於胎毒論、年長男子出痘論、西部先見報痘八卦方位之圖、竝歌訣、命門包裹陰陽五行論等數十項に互り



詳述してゐる。而して本書が痘疹界の指南書といはれる所以は前人未踏の境地を開いた點が多々あるからである。

五五 保幼新編 明成無忌著 光武九年カ 一册

本書は小兒の諸病症を運氣流行病源論、胎熱預治等數十項に分け、その各徵候を略述の上、對症治方を詳述したものである。而して序文にも見へてゐる通り、明の成某なるものの著に係るものであるが、論症制方最も當を得てゐる。而して本書は素人でも容易に理解し得るものであり、家庭の常備醫書として好適のものとしてされてゐる。

五六 外科正宗 明陳實功著 寛政三年 四册

著者は李滄溟の言、醫之別内外也、治外較難于治内、何者、内之症、或不及其外、外之症、則必根于其内也、に共鳴し、四十餘年間この方針に則り醫術の研究に没頭したが、本書はその總收穫を纂輯したものである。即ち、外科の諸症を合して門を分ち、類を逐ひ、微は疥癬に至るまで収録の上、對症投藥方を明かにしたものである。

五七 外科心法要訣 清和親王等編 光緒一八年 石版 六册

本書は御纂醫宗金鑑の卷七十五至九十に収録されてゐる外科心法要訣であつて、光緒一八年上海の五彩書局に於て刊行したものである。十六卷六冊に纏めてあり、繪圖を豊富に挿入してあるので、繙讀に至便である。

五八 傅氏眼科審視瑤函 明傅仁宇著 崇禎甲申(順治元年) 六册

本書は眼科一般に關する著述であるが、その内容は、前賢の醫案、病因、病種、治方、藥方等數十項に互つて詳論してゐる。著者の貫録に就ては陳盟が本書の序文に於て、「己巳余病目、謫歸、借憇秣陵、偏訪長桑、而不得其人也、聞彌目獲觀、傳君授余上池、而霍然蘇、豁然瞭也、因喟然嘉歎久之、と言つてゐる。

### 朝鮮之部

五九 黃帝內經素問大要 李圭峻編 光武八年 朝鮮木活字版 二册

本書は嶺南の醫宗石谷李圭峻が、素問に就てその弟子と問答した二十五篇を集録したものである。而して本書は素問の大義を最も簡潔に纏めたもので、素問研究者の必讀書とされてゐる。著者は慶尙北道延日郡の産で、醫道の造詣特に深く、嶺南地方の醫生の中には彼の薰陶を受けた者が頗る多い。



六〇 纂圖方論脈訣集成

許浚校

光海君四年

四册

本書は宣祖が世に據る可き脈經のないことを憂ひ、宣祖十四年、通訓大夫行内醫院僉正許浚に命じて六朝高陽生著、纂圖脈訣の詞旨の鄙淺並本眞を失つた點等を校正せしめたものである。而して本書は李朝中期の醫學勃興の因を爲したものと一つであるが、上梓されたのは光海君四年と見られてゐる。

六一 鍼灸要訣

柳成龍著

大正一四年

石版 一册

支那には早くから多くの鍼灸書があつたが、その治病の方法が曲折多端、變化無窮でその理解が困難であつたことに鑑み、簡潔平易を旨として編著したものである。著者はこの外に醫學辯症、醫學指南があり、又文祿役當時の朝鮮の領議政であつたことは注目に價する。

六二 針灸

灸

傳安鼎福編

朝鮮寫本 一册

古今の醫方に關する歌賦を編修したもので、内容は長桑君天皇秘訣、歌馬丹陽天星十二穴治難病歌、千金十一穴歌、治病十一症歌、通立指要賦、靈光賦、席強賦、標田賦、八法交會圖、八穴主治病症、八法臨時支干歌、靈龜八法圖、飛騰八法、蘭江賦、子午流注法等である。尙、本書は順庵安鼎福の自筆稿本と傳へられるものである。

六三 增辨證方藥合編

李常和編

昭和二年

一册

惠庵の代表的著述としては方藥合編と損益本草とがあるが、彼の子泌秀はこの兩者を圖表式に編纂して方藥合編と名づけたのである。本書は博く前聖の言を採り、繁を刪り、要を撮つて方藥合編を平易化したものである。

六四 萬病萬藥

金海秀編

昭和五年

一册

漢唐宋元明清朝鮮等の歴代醫書中より名方を病名、藥名、引用書の三項目に拔萃編纂したもので、その引用書を明かにしてゐる點より見て相當良心的勞作と見られる。尙、本書はその姉妹篇である大東醫鑑と共に朝鮮醫海の寶筏であることは疑ない。

六五 嶠南書社新編妙方

丁若鏞編

昭和一三年

石版 一册

本書は儒學と醫道の造詣が深かつた著者が家庭日用之費として編著したものである。然るに、先生の歿後、徒らにその子孫の家に死藏されることを慨歎する者が多かつた。其後豊山後人柳道昇が丁尙鎮家所藏の草本を得て石版に附したのが本書である。



六六一 金方 金弘濟編 昭和三年 石版 四册

古今の漢方書を廣く涉獵して編纂したもので、内景篇、外形篇、運氣等、雜病篇二卷、婦人門等、本草經絡等の八卷よりなる。朝鮮醫生の愛讀書の一つである。

六七 秘傳神方 權大變編 昭和八年 石版 一册

本書は製藥符呪等に關聯する秘傳神方を集成したもので、内容は活人寶鑑、濟東秘笈、奇觀單方、治痔單方、咳嗽神方、驗方秘笈、癩疹別方等である。

六八 古今實驗方 安昶中編 昭和一二年 一册

神農氏以後醫方書は數多く世に出されたが、實驗の良方を傳へるものが少く、石室秘傳、道家寶傳なるものが坊間に傳はる位であつた。所が本書は著者が道家秘傳を入手してその缺を補ひ、兼ねて諸賢の驗方を添加して一書となしたものである。

六九 湯液新訣 朝鮮寫本 四册

本書は古今の醫書並民間療法より秘傳名方を集録したものであるが、殊に卷末に、溫熱、甘、涼、寒、苦、辛、酸、

鹹、平、淡、冷、毒、煖等類に隨つて各々の藥性歌を附してあることは興味多いことである。

七〇 修養叢書 傳安鼎福編 朝鮮寫本 一册

本書は攝生に關する古今諸家の妙傳秘方を博搜纂輯したもので、英祖朝の實事求寔學派の先鋒であつた順庵安鼎福の家藏本である。その内容を見るに、攝生集覽全抄、攝生要義抄等で、特に房中篇、孫真人枕上記五禽戲法等の收録は注目に價する。

七一 東醫寶鑑 許浚著 光海君五年 朝鮮木活字版 二五册

本書は朝鮮杏林界の泰斗許浚が支那朝鮮の醫書を參考して編纂したもので、朝鮮醫書の最高峰のものである。この書は朝鮮のみならず、日本内地及び支那に於ても夙に刊行され、神農遺業界に尠らざる功績を残したものである。而してその初印本は稀靚に屬するが、本書は刊行の翌年即ち光海君六年に五臺山史庫に收めた初印本である。

七十二 醫宗損益 附藥性歌 惠庵著 李太王五年 七册

本書は許浚の東醫寶鑑に倣つて成書されたものといふ可く、その簡潔にして要を得た點に於ては朝鮮醫書の白眉とも見られる。尙、自家の説を増補し、藥性歌を附してあることは注目に價する。



七三 廣濟秘笈

李景華著 正祖一四四年版ノ後摺 四册

本書は難經、倉公方、金櫃玉函經、千金方、直指方、人蔘傳、東醫寶鑑、東醫見聞方等八十二種の漢鮮醫書に據り、各治驗を抜萃したものである。その成書の動機は關北咸鏡道觀察使であつた李秉模が道民が治病に巫覡を信じて醫藥を信じないため、命を失ふ者が多いのに鑑み、之が救済のため自費を以て出版頒布したものである。

七四 濟衆新編

康命吉受命編 正祖二三年序 五册

正祖の侍醫であつた康命吉は英祖四十五年太醫院に入つて以來、古今の醫書を繙讀する機會に恵まれた關係上、自ら得る所が多かつた。そこで在來のこの種の本の煩を芟り、要を取つて遂に本書を編成したが、特に正祖の筆削を蒙り、内閣に於て印出されたことは注目に價する。又、本書が清の嘉慶年間に北京に於て、翻刻されたことは興味深い事柄である。

七五 醫鑑刪定要訣

李以斗編 昭和一〇年 石版 三册

天文、地理、卜筮、算術等に精通した著者は嘗て醫鑑を涉獵して大いに得る所があつたことからその最要の者を抜抄し、隨類分門、之に自己の意見を加へて編著したものである。序文を書いた崔鍾應は「噫、世

之人之有志於濟世者、不可無是書也」と激賞してゐる。

七六 春鑑

李永春著 昭和二年 二册

本書は慶北義城郡舍谷面に於て開業した醫生李氏の編著に係るものであつて、對症投藥に關し多年の經驗を基礎にして略述したものである。

七七 醫家秘訣

金宇善著 昭和四年 二册

本書は著者が三十星霜に亙て苦心研鍊した結果の總和といふ可く、卓越した識見と洗煉された手法で對症投藥方を記したものである。東西醫學研究會中央總部都會長竹史李完珪氏が本書序文の一節に於て「三十星霜、苦心研精、作此神訣、普施澤於世、范公所謂不得爲良相、願爲天下良醫者、其此乎」と評してゐるが、之によつてその内容の概要を窺知することが出来る。

七八 醫方大要

金海秀著 昭和三年 一册

本書は儒醫兩道に通じ半島現代の扁倉であつた著者が、四十年間の實務と書見から得た知識を集成したものであつて、良き家庭醫書であり、又蒙學の津梁でもある。巻首に醫學博士志賀潔氏の序を掲げてあることは東西醫學の綜合研究が喧傳されてゐる昨今興味深いことである。



七九 東醫四象新編 附經驗方 元德必編 昭和四年 一册

本書は太陰人、少陰人、少陽人の三種に区分し、其各人に關し對症用藥を明示してゐる。これは從來の多くの書が漫然と用藥を記してゐる點より見て、その論述方法が一入科學的であるといへる。而して内容は四象辨論、四象經驗用藥彙分、太陽人用藥等である。

八〇 大東醫鑑 金海秀著 昭和六年 一册

本書は著者が杏林の明鏡たらしむる可く苦心編著したもので、このことは自序の一節に披卷一覽、病之吉凶輕重、皎如明鏡とある自負的言辭より見ても容易にその努力の程が忖度出来る。

八一 兩無神編 南載喆編 昭和六年 一册

本書は黃農以下明清名家諸賢の七十六醫書中より對症投劑式に披抄編著したもので、内容は通治部、外科部、女科部、兒科部等である。而して書名は北窓鄭先生の諺世間無橫死、地下無冤鬼に因んだものである。

八二 濟世寶鑑 文基洪著 昭和八年 一册

本書は醫生で而も鍼術師、製藥士、藥種商であつた蔚山居住の文氏が畢生の勞作として全蘊奥を傾けて編著したものである。内容は處方、鍼法、灸法、男女老脈、婦人經脈、西洋藥用量及各種注射、鍼法等であるが、著者が東西醫方に通じてゐたことは本書のもつ意義を一入大きくしてゐる。

八三 漢方醫學講習書 成周鳳編 昭和一〇年 石版 六册

本書は黃帝素問、內經、景岳全書、東垣十書、脉經、本草綱目、醫學入門、東醫寶鑑、濟衆新編等の漢鮮醫書中より適切なるものを披萃し、諺文交り文を以て漢方醫學講習教本として編纂したものである。尙本書は家庭に常備して得る所多かる可く家庭衛生の要道ともいへる。

八四 東和寶鑑 朝鮮寫本 一册

本書は咸南永興郡德興面新豐山里居住の醫生梁明煥の手澤本にして、一名子午流注針灸經ともいはれる。その内容を見るに、難病穴法、禁針穴、禁灸穴、婦人脉法等を收めてゐる。朝鮮醫生の針灸治療に對する認識程度を知る上に於てよき資料といへよう。

八五 時種通編 李鍾仁編 純祖一七年 朝鮮寫本 一册

本書は世の醫者が種痘方研究を等閑視するに鑑み、諸家の要語を取り、之に自己の經驗を加へて編著



したものである。本書の特異とする所は朝鮮最初の種痘書であるのみならず、簡略にして要を得、素人でも容易に開巻施行が出来る點である。本書は純祖十七年の刊行に係る木版本の寫本である。

八六 濟 嬰 新 編 李在夏編 李太王二六年 朝鮮木活字版 一册

本書は李太王二十六年五月嶺營(大邱)の牛痘局に於て刊行したもので、本書の出現によつて、西洋醫學に對する民衆の信賴が厚くなつたとも見らる。牛痘局とは李在夏が姜永老、姜海遠、趙寅永等と相謀つて開局し、牛痘の普及に勉めた所である。

八七 治 疹 指 南 韓敬澤編 昭和十一年 一册

本書は廣く古今名家の著録と、巷間の經驗方とを集め、これを分門序列したものである。内容は藥類、疹消後、禁忌等であり、麻疹を小兒の大關嶺とまで言ひ、多くの犠牲者を出した朝鮮に於ては本書のもつ意義は頗る大きいものである。

八八 麻 方 大 要 鄭在鎮著 昭和一三年 石版 二册

本書は群山の開院醫家鄭氏が經驗と書見から得た收穫を簡明を旨として編著したもので、原病篇、雜證篇、辨類篇、旁通篇、湯液篇の五篇より成る。詳略具備、對症投劑、小兒科の良書とされてゐる。

八九 痘 瘡 經 驗 方

朝鮮寫本 一册

本書は痘瘡の豫防並治療法を説いたもので、漢文と諺文で書かれてゐる。坊間によく寫本のまゝ流布されてゐるが、版本は極めて稀である。

九〇 麻 疹 篇 劉爾泰著 昭和九年 朝鮮木活字版 一册

朝鮮の名醫と言はれた著者は曲禮の「事親者、不可不知醫の句に感動して醫道に入つたが、本書はその醫道沉潜四十年の結晶の一部である。麻疹治療の方書は明に至つて漸く見ることが出来たが、本書は麻疹科の指針書であるといへる。

九一 醫 等 第 譜

朝鮮寫本 一册

本書は醫科仕官者の姓名並官位を各郷貫別に網羅集録したもので、全州李氏、慶州金氏、稷山崔氏、順興安氏、溫陽鄭氏、密陽朴氏、清州韓氏、南陽洪氏、淳昌趙氏、昇平康氏、豐基秦氏、川寧玄氏、密陽卞氏、溫陽方氏、漢陽劉氏、洪川皮氏等を收めてゐる。



60  
1513

五

一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

八、

九、



60  
1613



終